

AAINews

APPROPRIATE AGRICULTURE INTERNATIONAL CO., LTD.

国際耕種株式会社

TEL/FAX: 042-725-6250

〒194-0013 東京都町田市原町田 1-2-3 アーベイン平本 403

E-mail: aai@koushu.co.jp Home Page: http://www.koushu.co.jp

ウガンダ：ネリカ適応化計画に参加して

ネリカ適応化計画（稲育種）短期専門家として、ウガンダに3ヶ月ほど滞在する機会を得た。ウガンダの首都カンパラは赤道直下ではあるものの標高が1,300mであり、年間の平均気温が21度から25度、年間降雨量も1,200mm程度と、緑が豊かで過ごしやすい気候であった。

ウガンダの主食は、食用バナナ、トウモロコシ、キャッサバなどだが、その代表はなんと言っても、現地の言葉でマトケと呼ばれる食用バナナである。町のマーケットでは青いマトケが山積み（写真マーケット）になっていて、ウガンダ人が相当量のマトケを食べていることが実感できる。調理したマトケは、ねっとりしたマッシュポテト状（右写真定食のおさら）で、味は甘くはなく、少しだけ酸味がある。これに比べるとコメの消費はずっと少ないが、ウガンダ人がコメを嫌いなわけではなく、むしろお祝いの時に食べるごちそうとされている。特に田舎の農家にとっては、年に数度しか食べることができない、ある意味あこがれの食品だという。

最近のコメの消費量が年々増加しており、田舎町でも食堂に行けばコメのご飯を食べることができた。この増加する消費量の半分以上にあたる8万トンから10万トンが輸入に頼っており、コメの自給率の向上はウガンダ農業の重要な課題となっている。湿地の多いウガンダ東部の灌漑稲作の強化も期待されているが、灌漑システムを必要とせず、畑地で栽培可能な陸稲ネリカ品種は適応範囲が広いこともあり、この問題を解決するものとして期待されている。JICAも2004年から長期専門家を派遣し支援をきており、陸稲ネリカの栽培面積は、ゼロの状況からはじまり、現在は18,000ha以上に達していると考えられている。

今回の業務は農業試験場内での品種特性調査の指導が中心であったため、農家を訪問する機会は少なかったのだが、ウガンダの畑作農家が、一つの作物に極端に依存せず、畑にはバナナ、トウモロコシ、キャッサバ、豆など複数の作物を植えているという様子を実際に見ることができた。様々な作物の中に、一つの構成要素として陸稲ネリカが植えられている情景は、アジアの水田の稲を見慣れたものには大変新鮮であった。複合的な栽培は、干ばつなどによるリスクを分散するのに有効であるし、輪作することにより、連作障害の回避もできているようだ。伝統的な営農システムの中に無理なくネリカが取り入れられているといえる。こうした「無理のなさ」が、ウガンダにおける陸稲ネリカ普及が順調に推移してきている大きな要因なのだろうと感じた。

（小島、2007年7月）



ウガンダ定番の食事
奥の黄色いペーストがマトケ



農家畑（手前に豆とトウモロコシ、奥にネリカトウモロコシ、バナナも見える）



マーケット（カンパラのマーケットの朝）